



レズでドMなOLの性癖が
後輩にバレて調教される

美世（みよ）はソファーに深く腰かけ、カップのアイスのスプーンで口に運ぶ。お風呂上がりにクーラーの効いた部屋でアイスを食べることが、美世にとっての至福の時間だった。

こんなに幸せな時間を味わえるのなら、夏の暑さもそう悪いものではないのかもしれない。そう思いながらも一口アイスを口に運んだとき、一件のメッセージがスマホを光らせた。

（夏波（かなみ）先輩だ。またゲームのお誘いかな？）

よく一緒にゲームをする仲の会社の先輩。

美世はアイスを机に置き、メッセージを開く。

『京香様、本日の調教メニュー、完了しました。』

「えっ…？」

届いていたのは予想外のメッセージ。

（宛先間違い…？ ていうか、調教メニューって…）

混乱する美世に、畳み掛けるように追加で写真が届く。そこには、全裸で目隠しをし、ソファーの上で脚を開いている夏波が写っていた。秘部に挿さったバイ

ブには愛液が垂れていて、目隠しの上からでも表情が蕩けているのが分かる。

美世の心臓が一瞬で跳ね上がる。

(夏波先輩…どうということ…?)

頭が真っ白になりながらも、視線は画面から離れなかった。

会社では仕事をてきぱきとこなし、周りからも一目置かれている優秀な夏波の衝撃的な姿。

(あの夏波先輩が…こんな…)

呆然とする美世の元に再びメッセージが届いた。

『ごめん、間違えた。違うの、私じゃなくて、お願い、忘れて!』

慌てふためいた文章からは、普段の冷静さは微塵も感じられなかった。

美世の胸に、ふつふつと静かな感情が湧き上がってくる。ずっと憧れていた夏波先輩。その憧れはたぶん、仕事の面だけではなかった。

体を疼かせながら、メッセージを送信する。

『この写真、夏波先輩ですよね？』

送信してすぐに既読がつき、夏波からメッセージが返ってくる。

『違うの、ほんとに違う』

『目隠ししてても見間違えるわけありません。夏波先輩にこんな趣味があったなんて…』

『お願い、忘れて』

『別に、悪いことじゃないと思いますよ？ もう写真も保存しちゃいました』

『消して、ほんとにお願い』

『夏波先輩、直接話しましょう。明日、私の家に来てくれますか？』

『分かった、行くから、このことは誰にも言わないで』

『それは、夏波先輩次第です』

美世はもう一度、夏波の写真をじっくりと眺めた。とても信じられない淫らな姿がそこには写っている。

画面の中の夏波の肌を指先でなぞる。

(夏波先輩、誰かに調教されてるってことだよね…？

私も、夏波先輩を…)

明日のことを想像し、手が無意識に下腹部へと伸びる。ショートパンツの上から左手で秘部をなぞりながら、右手でメッセージを送信する。

『夏波先輩、明日は楽しみましょうね?』

秘部をなぞる指が速くなっていく。アイスはもう、すっかり溶けてしまっていた。

翌日、聞き慣れたはずのインターホンの音が、普段とは違い美世の耳を淫靡にくすぐる。ドアの外には明らかに顔を強張らせた夏波が立っていた。

「夏波先輩、よく来てくれましたね」

夏波は何も言わずに俯いている。

「まずは上がってください」

言われるがまま部屋へと入った夏波は目を丸くする。テーブルの上には様々なアダルトグッズが並べられていた。

バイブ、ローター、目隠し…

「美世…これ…」

「どうかしました？　これくらい、別に普通ですよ。
まあ目隠しは、夏波先輩のために急遽用意したもので
すけど」

「だから、それは…」

夏波はこの期に及んで言い訳ができと思っている
のか、もごもごと弁明をしようとする。

「違うんですか？」

美世はスマホを操作し、昨日保存した夏波の写真を
見せる。

「本当にお願ひ、消して、誰にも言わないで…」

「だからそれは、夏波先輩次第です」

夏波は立ったまま拳をぎゅっと握って肩を震わせて
いる。

「ちょっと先輩、これじゃ私がいじめてるみたいじゃ
ないですか。私は、夏波先輩のことをもっと知りたい
だけなんです」

夏波はそれでも無言を貫く。

「昨日も言いましたけど、別に悪いことじゃないと思いますよ？ 素直に認めたら、きっと楽しいことが待ってますよ？」

その言葉と、机に並べられた玩具に、夏波の頭の中に淫らな想像が膨らむ。後輩である美世から、全裸でバイブを押し込まれる。その想像だけで、夏波の秘部がじんわりと湿り気を帯びてくる。

「どう、すればいいの？」

美世はソファーに座り、自分の太ももをポンポンと叩いた。

「ここに寝てください。私の太ももの上に」

夏波は戸惑いながらも言われた通りにする。美世の柔らかい太ももを頭で感じ、思わずドキッとしてしまう。

自分を見下ろす美世と目が合い、咄嗟に顔を逸らそうとするが、美世の手がそれを許さない。頬に手を当て、語りかけるように言う。

「目を逸らさないでください。そのまま、私の目を見

たまま、スカートを捲って、ショーツだけを脱いでください」

美世の視線の中、ショーツをゆっくりと下ろす。上半身は服を着ているのに、下だけが美世の目に晒される。

「いい眺めです…」

「これ、恥ずかしい…」

夏波は手で顔を覆い隠す。

「恥ずかしがるのはまだ早いですよ」

次の命令が夏波の耳に落とされる。

「ここで、オナニーをしてください」

「えっ」

夏波の頬が一気に真っ赤に染まり、体が固まる。

「どうしたんですか？　できないんですか？」

夏波は答えられない。捲ったスカートの裾をぎゅっと掴んだまま、恥ずかしさと興奮で息を荒くしている。

「京香様、でしたっけ？　その人にはあんなに卑猥な写真を送ってるのに…」

「それは…」

「夏波先輩と京香様は、どんな関係なんですか？」

自分と京香様の関係。言えるわけがないのに、言っ
てしまいたいという気持ちもどこかにあった。

無意識に、京香様の姿に美世の姿を重ねてしまう。
会社では自分のほうが上の立場。それなのに。

「私は…京香様のド M ペットで…」

言いながら、また想像してしまう。全裸で四つん這
いにされ、美世にお尻を叩かれる。バイブを入れられ、
イってもイってもやめてもらえず、何度も突かれ続け
る。

手が自然と下腹部へ伸びていた。美世が唇の端を妖
しく吊り上げる。

「それで？　どんな調教をされてるんですか？」

「命令には、絶対服従で…もし従えなかったら、お尻
を叩かれながら、動けなくなるまでイかされ続ける…」

「へえ、他には？」

「拘束された状態でローターをクリトリスに固定さ

れて、私がイキ続けるところを、京香様はワインを飲みながら見てる…」

話しながら、夏波の指はすでにクリトリスを触っていた。

※体験版はここまでとなります。

続きは本編でお楽しみいただけると幸いです。